

たなばた

むかし、あるところに、働きものの若者がいました。

ある日のこと、きれいな娘むすめが若者のうちにやつてきて、

「わたしを嫁よめさまにしてくれませんか」といいました。

若者は、びっくりして、

「あんたのようなどこの大家たいかのお嬢じょうさまかわからないきれいな人を、こんな貧乏ひんぱうな家にもらうわけにはいかん」といつてことわりました。娘むすめは、

「いえ、貧乏はかまいません。ぜひとも嫁よめさまにしてください」といいました。若者は、

「では、年を切つて、嫁よめにもらいましょう」といいました。ずっとといつまでもではなく、年数を限つて嫁よめにもらうということです。

嫁よめさまは、かしこいい嫁よめさまで、ふたりは幸せに暮らしました。

そのうち、じきに年が明けてしましました。嫁よめさまは、

「やくそくの年数がたつたから、おひまをいただきます」といいました。

若者は、

「行つてもらつては困る。行かずにずっとここにおつてくれ」と頼みました。けれども、嫁よめさまは、

「いいえ、始めに年を切られてしまったから、どうしようもありません、おひまをください」といいました。そして、若者にユゴの木をわたして、

「じつは、わたしは天人です。これから天に帰りますが、きっとまた会いましょう。どうかこのユゴの木を庭に植えてください。百日たつたら木は天につつかえるでしょう。そうしたら、木をつたつて上がつてきてください」といいました。そして、すうつと天にのぼつていきました。

若者は、家のわきにユゴの木を植えて、毎日毎日待ちました。待ちかねて、九十九日に上がつていきました。百日といわれていたのに、九十九日目にいったので、あと少しで天にとどきませんでした。嫁よめさまは、それを見て、長い髪かみの毛をほどきました。そして、

「これをつかんで上がつてきてください」といつて、髪の毛を天からぱつと投げま

した。若者はその髪の毛をつかんで上がつてきました。そして、嫁さまの家に行つて、いつしょに暮らしました。

ふたりは、天の畠をたがやして、なかよく暮らしました。

ある日、若者は、野良へ出かけるときに、嫁さまにいいました。

「庭にきゅうりがたくさん生つているけど、とつてはいけないよ」

昼ごろ、嫁さまは、

（何もおかずはないし、『どるな』っていわれたけど、このきゅうり、一本とつて食べよう）と思いました。きゅうりをとつて、ほうちようでごつと切つたら、切つたところから大水が流れだしました。水は、どんどん流れて、畠で働いていた若者をおし流しました。若者は、

「たすけてくれ、たすけてくれ」とさげびましたが、どんどんどんどん流されていきます。嫁さまは、たすけることができません。嫁さまは、

「せめて年にいちど、七月七日に会おうなあ」とさげびました。

それが、たなばたの日です。七月七日に、切つたきゅうりを水に流して無事を祈れば、水の難なんから逃れるといつて、むかしの人はきゅうりを水に流したそうです。

おしまい

原話：『奈良県吉野郡昔話集』国学院大学説話研究会

再話：村上郁